

〈研究ノート〉

心理学を専攻する大学生における 「ボランティアミーティング」の意義 ——コロナ禍の影響による検討も含めて

菅野 恵 KANNO Kei

- 1 — 問題と目的
- 2 — 方法
- 3 — 結果
- 4 — 考察

【要旨】本稿は、心理学を専攻しボランティアを行っている大学生による「ボランティアミーティング」について報告し、その意義やコロナ禍による影響について検討を行った。ミーティングに参加し報告することで「ボランティアをやっていないと感ずることの出来ない悩みを持てるようになった」といった記述や、「困ったことをみんなに向けて報告することによって、客観的に問題を見ることができるようになった」、「自分だったらどうするかを考えるきっかけになった」といった回答が得られた。また、コロナ禍の影響として、「小学校で子どもたちと給食をとれなくなった」、「マスクの着用で運動量の多い遊びができなくなった」といったことも話題になった。ミーティングを行うことで、学生が活動をやりっぱなしにせず洞察を深めるきっかけになったことが考えられる。学生からは、具体的な実践例を話題提供し議論するといったような新たな提案もみられたことから、今後の発展を願いたい。

1 — 問題と目的

心理学を専攻する大学生には、心のケアを担う対人支援に関心を持つ者が多く、体得的に学ぶことが求められる。そこで教員からボランティアの情報を伝えるものの、きっかけをつかむことができず消極的な姿勢のままにいる学生も多く存在する。そもそもボランティアの語源はラテン語のボランタス (Voluntas) であり自由意思や自発を意味することから、教育の一環としてボランティアをさせるとなると矛盾が生じかねない。また、国家資格である公認心理師を目指すのであれば、心理実習の授業の一環で現場に入ることになるが、実務経験となるものの大学が用意した実習先での活動のためボランティア活動と意味合いが大きく異なってくる。

先行研究によると、ボランティアを自発的に行ったか否かで予後に影響があるという。過去に自発的なボランティア活動を行っていた場合は今後のボランティア活動開始に意欲を示すものの、課された活動のみを経験した場合に意欲が低下することを明らかにしている (柴田・大東・大山・古川, 2004)。このことから、大学では学生の自発性を尊重しながらきっかけを与え、ボランティアを行っている者のサポートに徹することが求められる。

さて、近年の大学生のボランティア事情はどうであろうか。大学生によるボランティア活動の実態として、約 2,000 人が回答した大規模調査（国立青少年教育振興機構，2020）があり、自主的にボランティアに参加したことがある者は 23.1%という結果であった。そのうち、教育学・保育学系の学生が約 6 割と高い割合であり、心理学系は 3 割で他の専攻と比べて低めとなっている。また、小学生を対象とした活動が 3 割と最も多くを占め、特定のニーズや課題を抱えた子どもを対象とした活動は約 1 割となっている。またボランティアの動機としては、「自分の成長につながる」が 45.4%と半数近くであり、「困っている人の手助けがしたい」（21.5%）といった利他的な動機よりも利己的な動機を持つ者が多い傾向となっている。さらに、ボランティア活動に求められる支援として、「ボランティア同士が交流し、情報交換できる機会を充実させること」と回答した者は、「とても重要」と「少し重要」を併せると 8 割を占めていることから、ボランティア同士のサポートグループの必要性を明らかにしている。

学生ボランティアの活動の領域別では、教育領域において学生ボランティアを活用する事例は比較的みられる。9 割以上の生徒が不登校経験を有する全日制単位制高校では、学生ボランティアがオープンスペースに居て生徒とかかわる取り組みを報告し、教師とコーディネーターとの協働を通じた学級復帰の支援体制づくりについて論じている（神崎・サトウ，2018）。しかしボランティア活動の課題も残されている。たとえば、多忙な教師と情報共有ができずに悩む学生が存在するといった指摘があり（秋元・落合，2007）、学生がひとりで問題を抱え込まないための工夫が求められる。また、廣澤・大西・笹原・鈴木・織田・綾城・松木（2021）は、学生ボランティアが学校現場の人手不足を担うのではなく、教師らと情報共有を行いながらチーム支援の一端を担う構造が支援に有効ではないかと問題提起している。他にも小学校のボランティア学生を対象に面接調査を行った杉本（2017）によると、ボランティア学生が役に立っている感覚をそれほど感じられずに活動していることから、目的や役割を確認するためにも活動に対する評価を学生にフィードバックすることの必要性について言及している。

一方、福祉領域での学生ボランティアの動機に関する先行研究では、「ボランティア活動を通して学べる」「視野の拡大」といった利己的な動機が多くみられることを示している（谷田，2001）。災害ボランティアでは、全般的に若者たちにポジティブな影響を与え、人生をより豊かにする「かけがえのない経験」として肯定的に位置づけられていることがわかっている（近藤・國重，2021）。

岡鼻（2013）は、諸外国の大学生の比較を通して過去 1 年間のボランティア経験を有する割合はアメリカやカナダでは 8 割近く占めていることを指摘し、日本の大学生のボランティア活動への消極性について言及している。そのため、ボランティア活動を推奨する際には、大学のカリキュラムに導入することでボランティア活動に参加する大学生の数を増やすよりも、まずはボランティア活動に興味をもってもらうような別の働きかけを行うことの重要性を指摘している。これまで大学でボランティア養成講座に取り組んでいる報告（曾我部・近藤・中村・森・西本，2019）や、コーディネーターがかかわりサポートすることに

よって、学生の学びが大きく前進するといった指摘もある（木谷，2002）。ある大学では、「地域貢献・地域交流委員会」を立ち上げ教育的観点から学生のボランティア活動の推進を試みている（田島・高野，2009）。

本稿では、自主的にボランティア活動を行っている学生を中心とした「ボランティアミーティング」（以下、ミーティングと略す）の参加者を対象として、ボランティアの状況を把握したうえで、ミーティングの意義や、2020年からのコロナ禍による影響などについて検討を行うことを目的とする。

2 — 方法

1) ミーティング立ち上げの経緯

首都圏の私立大学で児童心理学を専攻し、児童虐待やスクールカウンセリングを中心に学んでいるゼミ生（3、4年生対象）がボランティアを希望したことによってミーティング立ち上げの発端となった。ボランティアを行っているゼミ生の様子を知った他のゼミ生が数名ボランティアを希望するようになり、ゼミ教員が「それぞれ異なる現場で活動しているのであれば互いに刺激を受けあえる場があるとよいのでは」と提案し、ゼミ生が賛同したことがきっかけで2019年度から本格的にミーティングを定期開催することになった。ミーティングの趣旨は活動報告をメインとし、他のメンバーから刺激を受けあうことを目的とした。2020年度はコロナ禍でオンライン授業になったが、ミーティングをオンラインで不定期実施し、ゼミ教員がメール等でフォローを行っていた。

2) 対象者の内訳

対象者は、2021年度にボランティアを行っている、もしくはボランティアを迷っている3、4年生のゼミ生11名と他学科の学生1名であった。4月当初、3年生の5名はボランティアを迷っていたが、順次希望のボランティアを行うようになった。なお、他学科の学生は、もともとボランティアを行っており、ゼミの活動に関心をもったことから途中からミーティングに参加するようになった。

3) 頻度・時間帯・場所など

原則月1回、昼休みの時間帯に約30分間行った。場所は大学内の教室で、輪になるようにイスを配置して行った。ファシリテーターは、ゼミ教員である筆者が行った。

4) アンケートの実施と内容、分析方法

2021年10月にGoogleフォームを用いてアンケートを実施した。質問項目は、基本的属性、ボランティアの内容、ボランティアの動機、コロナ禍で困ったことについて、ミーティングの報告内容、ミーティングに参加することによる気づきや学び、ミーティングで他

にどのようなことを望むか、など 12 項目について自由記述で回答を求めた。分析方法としては、得られた一部の自由記述については KJ 法を参考にカテゴリー化したうえで Table に示した。その他の自由記述については、一部抜粋してそのまま掲載した。

5) 倫理的配慮

ゼミ生にはボランティアの語源を伝え、「ボランティアのきっかけを与えることには惜しみなく協力しますが、強制することはありません」と説明し、年度初めにボランティアの紹介可能な団体一覧を紙媒体で配布した。また、ミーティングでは個人が特定されないように報告し、そのうえで共有した情報の守秘を徹底することとした。アンケートへの協力については、回答しなかったとしてもゼミの成績に不利益が生じないことを説明し、回答するか否かは自由であることを説明した。

3——結果

1) 基本的属性

アンケートに回答した者は、11 名（3 年生 6 名、4 年生 5 名）であった。ボランティア実施期間は、2 年以上が 3 名、1 年半未満が 2 名、1 年未満が 3 名、6 か月未満が 2 名、3 か月未満が 1 名であった。ミーティングの参加期間は、1 年半未満 2 名、1 年未満 3 名、半年未満 6 名であった。

2) ボランティア先の内訳

ボランティア先の内訳 (Table1) は、児童福祉系が 6 件、教育系が 6 件であった。うち 1 名は 2 件掛け持ちしていることから計 12 件となった。児童福祉系では児童養護施設が 4 件であり、異なる 3 つの施設に出向いていた。教育系では公立小学校が 3 件と多く、他には不登校支援や学習支援の現場であった。

3) ボランティアの動機

ボランティアの動機を Table2 に示した。個人的関心、進路、ゼミ教員・進路、ゼミ教員の 4 つのカテゴリーに分類された。個人的関心が 6 件と最も多く、なかにはゼミで取り組んできた児童虐待防止啓発イベント（オレンジリボン運動）がボランティアのきっかけになっている学生もいた。子どもと関わる仕事や児童養護施設への就職など将来を見据えてボランティアを開始した学生も 3 名存在した。

4) ミーティングでの主な報告内容

ミーティングでの主な報告内容は、活動内容が中心であったが、印象に残った出来事や対応に困ったケース、コロナ禍で活動できない状況などを報告していた (Table3)。

Table1 ボランティア先の内訳

領域	活動場所	ボランティアの内容
児童福祉系	児童養護施設 A	学習支援、生活支援
	児童養護施設 B	学習支援、子どもたちと一緒に遊ぶ
	児童養護施設 B	学習支援、子どもたちと一緒に遊ぶ
	児童養護施設 C	洗濯、夕食準備、食器洗い、絵本読み聞かせ、就寝介助
	放課後児童クラブ	送迎、生活支援
	子どもセンター	遊びの企画及び実践
教育系	アウトリーチ型支援	家庭訪問による学習支援
	公立小学校 A	指導補助、丸つけ、休み時間の対応、メンタルケア
	公立小学校 B	教室での指導補助、安全指導補助
	公立小学校 B	教室での指導補助、安全指導補助
	適応指導教室	不登校の中学生を対象とした教室での指導補助
	公的施設	ひとり親家庭の子どもへの学習支援

Table2 ボランティアの動機

カテゴリー	ボランティアの動機
個人的関心	<p>ボランティア自体は元々子どもと関わる仕事に興味があり、小学校で子どもたちがどのように過ごしているのかが気になり小学校に連絡してボランティアに至った。</p> <p>大学1年次に児童福祉関連団体の講義を受けて少し興味を持ち、3年次のゼミでオレンジリボン運動(児童虐待防止啓発イベント)の活動をしたことでボランティアをしたいと思うきっかけになった。</p> <p>運営母体がさまざまな習い事を運営していてそのクラブチームと試合をした経験があることでつながりがあったため。</p> <p>児童養護施設に関心があり、実際の雰囲気や施設ごとの違いを見てみたいと思ったから。</p> <p>実際の現場でボランティアすることで、支援の仕方や対応の方法が学べると思ったから。</p> <p>児童養護や被虐待児に関心があり、授業などで知識を得るだけでなく実際の現場を見てみたい、体験してみたいと思ったから。</p>
進路	<p>子どもと関わる職に就きたいと考え、事前に子どもと接する活動をしたと考えたから。</p> <p>将来、児童養護施設への就職を考えているため、学生のうちに経験を積んで勤務先で活かしたいと思ったから。</p>
ゼミ教員・進路	<p>将来子ども関係の職につきたいと考えていて、学生の間に関心ある経験や知識を積み重ねたいと考えていたときにゼミ教員からきっかけをもらった。</p>
ゼミ教員	<p>ボランティアのきっかけをゼミ教員が与えてくれたから。</p> <p>ゼミ教員に誘ってもらったことがきっかけとなった。</p>

Table3 ミーティングでの主な報告内容

主な報告内容
<p>ボランティアの活動内容全般。</p> <p>活動場所、活動内容、ボランティア先の近状報告。</p> <p>ボランティアで感じたことや困ったこと。</p> <p>自分がどのような支援に携わっているのかということ。</p> <p>活動内容、最近起こったエピソード。</p> <p>担当の子どもと遊んだ話や関わっていく中で気になったこと。</p> <p>出向いている児童養護施設で行っている内容や子どもとの関係性。</p> <p>ボランティアの内容や印象に残った出来事、対応に困ったことなど。</p> <p>学童保育の環境や取り組みについて。</p> <p>活動内容や担当している子どもの特徴、最近の様子。</p> <p>担当児童の様子や活動内容(勉強面や遊び面など)の報告に加え、緊急事態宣言で活動できていないことも報告。</p>

5) コロナ禍によってボランティアとして困ったこと

コロナ禍によって活動に支障をきたすといった状況が生じた。具体的には小学校で子どもたちと給食をとれなくなった、マスクの着用で運動量の多い遊びができなくなった、ボランティア事態が中止になってしまった、子どもの表情がわかりにくいことなどがあげられた (Table4)。

6) 報告することによる気づき

報告することによる気づきとして、Table5 に一部抜粋した。「ボランティアをやっていなければ感じる事の出来ない悩みを持てるようになった」といった記述や、「困ったことをみんなに向けて報告することによって、客観的に問題を見ることができるようになった」といったコメントも示された。

7) 他のメンバーの報告を聴くことによる学び

他のメンバーから報告を聴くことで、他のボランティアへの関心の高まりや困り感の共有などがあげられた。また、「自分だったらどうするかを考えるきっかけになった」といった回答もみられ、自分の活動に活かすことができたというコメントもあった (Table6)。

8) ミーティングで報告の共有以外でできそうなこと

ミーティングで報告の共有以外でできそうなことを尋ねたところ、「具体的な実践例を話題提供し、対応策をみんなで考え意見を出し合う」、「子どもたちへのスタンスの仕方を共有したい」、「少人数のグループでディスカッションしたい」、「悩みを共有しメンバーからアドバイスをもらえる場にしたい」などがあげられた。



写真 1 ミーティング風景

Table4 コロナ禍によってボランティアとして困ったこと

小学校のボランティア先で給食を子どもたちと食べることができず、残念な顔をされてしまうのが心苦しい。給食を一緒に食べるとするのは子どもとの距離を縮められる重要な意味があると考えているので、そういった部分で困っている。
ボランティア先が一時的に閉館してしまい、活動が行えなくなった。また、マスクの着用を前提とするため、運動量が多い遊びや密になってしまおうと考えられる遊びができなくなってしまった。
活動がオンラインになった時に子どもたちとどのようにして関われば良いのか分からなくなったこと。
感染対策（マスクなど）に対する価値観が子どもたちと違っていても注意できなかった。
ボランティアが出来なくなったこと。同じ部屋でマスクをしていない子どもや職員と長時間共に過ごすので、コロナウイルスの感染のリスクが高まったこと。濃厚接触者になることにより、自身の生活にも影響が出ることが増えたこと。
コロナ禍で緊急事態宣言が出て、ボランティアに行けなくなってしまったこと。
子どもたちと一緒に食卓で食事が出来なかったこと（職員は少し離れたテーブルで食事を取っていた）。
マスク着用のため子どもたちの表情がわかりにくいこと。自分もマスクをしているため、子どもに威圧を与えないように声や目の使い方に気を使ったこと。
大勢の子どもたちがいる中で、マスクをしなくて大声で喋る子どもや遊んでいる子どもの改善が難しいこと。
体調管理により気を使うようになり、些細な外出も少し怖くなったこと。
緊急事態宣言による影響で児童養護施設に一般の人やボランティアの人が立ち入ることができなくなったため、子どもと関わるボランティア活動ができなくなったこと。

Table5 ミーティングで報告することによる気づき（一部抜粋）

意外と活動内容をまとめるのが難しかった。というのもボランティア先ではさまざまなことがあるので話したいことが山ほどあり、どんな話題に絞るかを毎回迷いながら考えていた。
ボランティアをやっていないと感ずることの出来ない悩みを持てるようになったと思う。
ボランティアについて話すことがボランティアミーティングくらいしかないの、そこで話すことによって自分がこういうことを嬉しいと思ったこととか困ったこととか自分自身であらためて気づくことができた。
自分の活動を客観視できるようになったという気づきがあった。
困ったことをみんなに向けて報告することによって、客観的に問題を見ることができるようになった。
ゼミ教員からのコメントから忘れていたことを思い出し、初心に帰ることができた。また、学童保育のスタッフとの関わり方を変えることが出来た。
難しい場面に直面した時に教員からアドバイスがもらえることで、自分の次につながると思った。

Table6 他のメンバーの報告からの学び

自分自身が考えていることと全く違う視点があったり、自分ではあまりわかっていなかったボランティアの業種もあったりしたので、自分がわかっていないことを学ぶことができた。
今まで「子どもにどのような対応をし、どのような結果になった」というような報告は極稀であり、子どもへの対応として学びを得た実感はない。ボランティア先でのコロナ禍の対策や対応の方が聞く機会が多く、そちらは学びになる部分もあった。
自分よりもアクティブなボランティアをやっている人がいたので凄いなと思うし、自分も他のボランティアをやってみようかなと思った。
学生が関わることができるボランティアはさまざまなものがあるということを知った。こういうボランティアもあるからやってみようというきっかけになった。
他の児童養護施設の様子や全然知らない学校ボランティアなどについて知ることができた。他のメンバーが困っていることが自分の困り感に近かった。
ボランティア先で仕事内容が異なり、子どもとの関係性も異なっているなど多種多様な子どもたちとの関わりがあるという学びがあった。
同じような困りごとがある場合もあれば、はじめて聞くような事例もあるので、自分だったらどうするかを考えるきっかけになった。
現状、コロナ禍で活動することが難しい中で学童保育や療育といった領域、子どもと関わる活動の需要があり供給を満たすことが難しいと感じた。
他者と自分のボランティア活動の違いや支援の仕方の特徴を知ることができ、自分の活動に活かすことができた。

4——考察

ボランティアの活動報告を中心としたミーティングを行うことで、学生が活動をやりっぱなしにせず洞察を深めるきっかけになったことが考えられる。先行研究（池田，2001）では、活動後のふりかえりの場面で「学校で学べないことを学んだ」といった洞察があり、他者との相互作用を通して「今まで気づかなかった自分」や「新たな自己の発見」を意識化すると述べている。このことから、ミーティングを通して意識できなかった気づきを与えた可能性がある。さらに、これらは教員や大人が用意した答えではなく、自らが体験を通じて見出し、気づき、獲得していく学びである（池田，2001）といった指摘もあるため、ゼミ教員がファシリテーター役に徹したことで学生の主体性が引き出せたのではないかと推測される。

コロナ禍で思うように活動できなかった学生は、ボランティア先から活動再開の連絡がないままであったが、同じような立場のメンバーと共有することで悲観することなく見通しをもって活動再開の準備に備えることができたのではないだろうか。

課題として、ボランティア先でのフォローがどの程度なされているかまで把握することができなかった。看護学生の特別支援学校でのボランティア活動に関する先行研究（増田・別所，2018）では、保護者や教師がどのようにボランティア学生をとらえているかを調査しているが、学生に対して好感や親近感を抱き、学生の成長を応援したいといった認知がなされていたことから、ボランティアを受け入れる側のあたたかい眼差しは相補的な関係性に発展する。ボランティア先で具体的な指示がなく、フォローが十分ないまま問題を抱えやすい現場もあるため、ミーティングで語られにくい悩みがもう少し語られるとよいかもしれない。

学生からは、具体的な実践例を話題提供し議論するといったような新たな提案もみられた。ミーティングの時間の確保が難しい状況もあるものの、ミーティングの運営も学生主体に移行していくことが望ましいため、形を変えてボランティアミーティングが発展していくことを願いたい。

《文献》

- 秋元 雅仁・落合 俊郎（2007）. 特別支援教育体制における、小中学校での大学生サポーター活用に関する考察 LD 研究, 16 (2), 155-163.
- 廣澤 愛子・大西 将史・笹原 未来・鈴木 静香・織田 安沙美・綾城 初穂・松木 健一（2021）. 大学生による学校支援ボランティアにおいて児童生徒に肯定的な変化が見られた事例の特徴 教育心理学研究, 69, 187-203.
- 池田 幸也（2001）. ボランティア活動と学び 学校教育研究, 16, 68-83.
- 神崎 真美・サトウタツヤ（2018）. ボランティアと協働した学級復帰の支援体制づくり—全日制単位制高校におけるフィールドワーク— 教育心理学研究, 66, 241-258.

- 木谷 宜弘 (2002). 高等教育機関におけるボランティア学習の意義と課題 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報, 7, 14-29.
- 国立青少年教育振興機構 (2020). 「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター
Retrieved from https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/142/ (2021年11月5日)
- 近藤 誠司・國重 舞 (2021). 大学時代における災害ボランティア活動の影響に関する基礎的考察—国際ボランティア学生協会 IVUSA を対象としたアンケート調査より— 防災教育学研究, 1 (2), 105-116.
- 増田 由美・別所 史子 (2018). 特別支援学校に通う子どもの保護者と教員がとらえた看護学生のボランティア活動の現状・ニーズ・課題 日本小児看護学会誌, 27, 1-8.
- 岡崎 千尋 (2013). ボランティア活動経験が大学生のボランティアイメージに及ぼす影響 心理科学, 34 (2), 68-76.
- 柴田 和子・大東 貢生・大山 治彦・古川 秀夫 (2004). ボランティア活動の動機における自発性と外発性 龍谷大学国際社会文化研究所紀要, 6, 119-131.
- 曾我部 敦介・近藤 益代・中村 年男・森 実紀・西本 浩章 (2019). 大学生におけるボランティア養成に関する研究 Leisure & Recreation (自由時間研究), 43 (1), 94-98.
- 杉本 希映 (2017). 大学生の小学校におけるメンタルサポート・ボランティアの体験プロセスとシステムの検討 学校心理学研究, 17, 29-43.
- 田島 栄文・高野 恵子 (2009). 短期大学生のボランティア活動活性化へ向けた今後の課題 甲子園短期大学紀要, 27, 101-105.
- 谷田 勇人 (2001). 福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析 社会福祉学, 41 (2), 83-94.